

詩と科学のレゾナンス

Humphry Davy、William Wordsworth、Ann Yearsley をめぐって

大田垣裕子

1. はじめに

Wordsworth の生きた時代、芸術家、詩人、科学者はそれまで典拠としてきた知識を経験に、記述や理論を実験に、絶対主義を相対主義に置き換えた。彼らの多くは Wordsworth と同様の葛藤を抱えていた。それはいかにも彼らが実際に経験する常に変化し予測不能で神秘的な自然界・人間界と従来の宗教や教科書で教わったニュートン的な科学を一致させるか、彼らの研究に適した言葉を編み出すか、そして彼らの聞き手に最も利するよう伝えるかであった。本発表ではその序文がイギリス・ロマン主義の詩的宣言とみなされる *Lyrical Ballads* の出版地、英ブリストルにおける知的交流サークルに加わった作家たちの中で、Davy、Wordsworth、Yearsley に焦点を当てて彼らの作品の中に読み取れる当時の科学知識を検分し、彼らが激動のロマン主義時代にいかに最先端の知を踏まえながらその経験を捉え、表現しようとしたのかを考察した。

2. Humphry Davy と不可秤量物質(imponderable substance)

Davy(1778-1829)はロンドンの王立科学研究所で講演し、化学を普及させた。豊かな文才、先鋭的知見、巧みな実験の実演により人々を魅了した。彼の幾多の学問上の功績の中には、電気分解による元素の発見、炭鉱用安全ランプの発明、酸化二窒素の麻酔効果の発見、牧草の生産性向上等草創期の農芸化学への貢献がある。彼の酸化二窒素に関する実験説明書が Thomas Beddoes(1760-1808)の目にとまり、ブリストル近郊クリフトンの気体研究所所長に 1798 年に任命される。Beddoes 宅には若手作家たちが出入りしており、そこで Davy は S.T. Coleridge や Robert Southey の知己を得る。彼らは才気煥発で化学研究への情熱に溢れた Davy に感銘を受けた。

Davy はクリフトンの高みからの眺めは故郷コーンウォールの美しさに匹敵するぐらいだと母親に書き送っている。Southey 編の *The Annual Anthology*(1799)に故郷の景観を謳った‘Extract from an unfinished poem on MOUNT’S-BAY’が収められている。ランズエンドの断崖をさまよう者は自然の‘the great laws’の印を探す者と‘fire poetic’で魂が熱い者のみで、彼らは‘the fire of Heaven’で暗雲が炸裂する時に、崖下の吠え猛る海に歓喜する。この‘fire of heaven’は後に彼が取り組むこととなる電気化学を指すと解される。Mary Fairclough は *Literature, Electricity and Politics 1740-1840: ‘Electrick Communication Every Where’* (2017)で当時、電気は熱、光、火、磁気とともに計測不能な不可秤量物質とみなされていたと記し、副題に Edmund Burke の言を引き、革命的思想が新聞等印刷物を介してだけでなく、不可解な方法で迅速かつ広範に伝播する喩えとして電気が使われていたと説明している。フランス革命時、山、噴火、雷等の崇高なイメージが人心を動かし革命へと導いた。特に雷は荷電の差をなくする、つまり上下の差をなくして平等にするものとして利用されたのである。上述の詩で光や火の描写も散見されるが、不可秤量物質の一つである光も Davy にとって終生の探究テーマであった。

3. William Wordsworth と光合成

Davy は Wordsworth の依頼に応じて 1800 年版 *Lyrical Ballads* を校閲した。その後には彼は気体研究所での酸化二窒素についての研究成果を評価され、ロンドンの王立科学研究所の職に就くこととなる。Davy と Wordsworth の相互影響関係を考察する際、Maurice Hindle¹ と Roger Sharrock²は Davy が 1802 年 1 月に王立科学研究所で行った *Introductory Discourse to a Course of Lectures on Chemistry*³ (以下『講義序説』)とその直後に出された 1802 年版 *Lyrical Ballads* の「序文」の間にみられる類似表現や内容の呼応を取り上げている。主として固定的な形態の存在や物質を調べるといふ従来のナチュラル・ヒストリーの研究のあり方に関して Wordsworth や Coleridge 等が抱いていた批判的考えに対して、Davy は『講義序説』で化学者は周囲の事物を修正・変化する力、殆ど‘creative’といえる力を与えられていると主張する(315)。知識と有益な技術によって人々が繋がれば、不公平な貧富、職業、階級、環境の差がなくなり誰の働きもうち捨てられることはないというリベラルな未来観を開陳している(323)。さらに植物が大気中に起こす変化について、光の媒介に密接に結びつき、葉が直射日光にさらされると酸素を放出し、日が当たらないと酸素を吸収し二酸化炭素を吐き出すと説明している (411)。

1802 年版 *Lyrical Ballads* 「序文」で、Wordsworth は詩人の知識も科学者の知識もともに喜びと言う。もし科学者の仕事が我々の状況に‘material revolution’をもたらすのであれば、詩人も直ちに科学者の後を追って、その研究対象の本質を感覚によって捉え、伝えなければならない、つまり詩人は科学者と協力関係にあり、その発見を詩の言葉で万人に届けねばならないとしている。Davy が Wordsworth に初めて直接出会ったのは 1804 年夏、湖水地方であった。同年初夏に‘I wandered lonely as a cloud’が書かれたとされている。Dorothy の日記によればこの詩の材をとった体験は 1802 年 4 月のことなので、この 2 人の出会いが作詩のきっかけになった可

能性がある。ここでは Davy と Wordsworth の影響関係という視点から作品の解釈を試みた。4月の強い風に踊り、輝く無数の水仙を凝視（‘gaze’）した詩人が水仙や湖水の波と一緒に喜びを感じる様が描写されている。清新な風、爽やかな水仙の香り、花や波の輝きや動きが、さまよう歩行のリズムに乗った触覚、聴覚、嗅覚、視覚、運動感覚の直截的なイメージによって聞き手に伝えられる。

先の Davy の講義で植物は日光エネルギーと密接に結びつき二酸化炭素を吸収し酸素を放出するという説明があった。この詩はその物質代謝のしくみを詩に変容して人々に伝えたものと解釈することも可能ではないか。現代の気候温暖化の最大の要因は炭素循環の乱れである。炭素循環は Joseph Priestley や Antoine Lavoisier が発見し、Davy が一般に普及させた。Wordsworth は光合成を知った詩人たちの最初の世代であった。彼は、自然は人間が支配するものではなく、人間が自然に、他者の生命活動の副産物に依存していることを認めていたといえる。詩人が水仙の喜びが湖面の波の喜びに勝っていた（‘Out-did’）と強調するのは水仙の行為者としての主体性を伝えるためではないか。彼が詩のテーマとしてセランダイン、デイジー、スノードロップ等の植物を取り上げるのは 1802 年以降である。また、この時期より後にソネット ‘The world is too much with us’ 等で工業化社会、大量消費、人間と自然の断絶を批判し、今日の私たちに直結する環境問題を提示している。

4. Ann Yearsley と気体研究所

最後に Bristol に戻り Yearsley(1753-1806)を取り上げる。1794 年 8 月 Beddoes が彼女のもとを訪れた。同年 4 月に彼は気体研究所を開設し新天地で支援者を求めようと動いていたからである。Yearsley はクリフトンで乳を搾って家々に売り歩くミルクメイドだった。その詩才を Hannah More(1745-1833)に見いだされた後、次々と作品を世に送り出した。気体研究所はクリフトンの温泉保養地の近くにあり、結核の研究と治療を行っていた。Yearsley は Beddoes の働きかけで Bristol・サークルメンバーと親交を深めていく。Terry Griner は ‘Ann Yearsley and Thomas Beddoes: Friendship and Pneumatic Medicine in Hotwells’ (2019)で Yearsley の詩と Beddoes の医学的テキストの共鳴について探っている。Poems, on Several Occasions(1785)の掉尾を飾る景観詩 ‘Clifton Hill’では結核治療法として温泉水、西風、激しい運動が推奨される。そこには後の Beddoes や Mary Wollstonecraft(1759-1797)の見解を先取りしている部分が見られる。Griner は Yearsley の当時の中・上流階級の娘たちが誤った ‘sensibility’ や ‘weakness’ を求められている風潮に対する批判的態度を指摘している。当時、最も厳しい女性の労働であった酪農に従事し、自然と動物との関わりを通じて ‘Sensibility Untaught’ を得た詩人が描くクリフトンの林(‘this tangled wood’)は周囲と分かちがたく絡まっている詩人の環境意識を示している。

さて Beddoes にとって、貧しい人々も最新の医学にアクセスできるようになることが生涯をかけての課題だった。人々の健康増進をめざす医学の進歩の手段としての ‘friendship’ という彼の考え方に Yearsley は応じて、The Rural Lyre(1796)において科学的進歩に関与する詩人の役割、そして彼女の役割を再解釈する 2 つのソネット ‘SONNET TO —’ と ‘SONNET TO THE SAME’ を発表している。1 つ目の詩で殉教者に喩えられた結核患者が寒い夜に独り目指すは気体研究所である。それは ‘pure flame’、‘bright fire’、‘spark’ だ。その火に掻立てられて詩人の心に友情が湧き起るという 2 行連で締めくくられる。続く詩も同じ気体研究所へ寄せられたソネットだが、夜明けの場面である。放蕩して夜を明かした保養所の客たちは健康な朝の息吹を吸うこともない。詩人は ‘one gem of infant light’ である 太陽神(‘Phoebus’)に対して、‘sacred strain’ を奏でて、「知恵の信奉者」(‘wisdom’s vot’ry’)に靈感を与えるように祈願している。Griner は Yearsley がこの数年後に Davy が酸化二窒素の実験を詩に書き留めたことを予見していたと解釈し、ここでの太陽神は Yearsley を含めた Bristol・サークルのメンバーが相互に関わり合いながら詩と科学の探究していたことを表していたとしている。

5. 結び

これまで主として、Bristol・サークルの Davy、Wordsworth、Yearsley の言説にみられる電気、光、火、風といった捉えどころのない不可秤量物質のイメージに着目して読んできた。それらは当時、解明されつつあった、そして今も解明の努力がなされている対象である。社会、経済、技術、様々な領域で革命が起こり、世界観、価値観の変換を迫られた時代に彼らがいかに難局を切り抜け、未来を創ろうとしたのかを、これらのイメージを手がかりに論じた。例えば、現在の私たちが直面している問題に環境変動があるが、その解決に向けて環境人文学の分野ではすべての学問分野が関連し合っており、それらの接触領域に可能性を見出している。横断的な知を追究する文学がその役目を担っていることを彼らが教えてくれているのではないか。

¹ Hindle, Maurice. ‘Humphry Davy and William Wordsworth: A Mutual Influence,’ *Romanticism* 18.1 (2012), 16-29.

² Sharrock, Roger. ‘The Chemist and the Poet: Sir Humphry Davy and the Preface to Lyrical Ballads,’ *Notes and Records of the Royal Society*, 17.1 (1962), 57-76.

³ Davy, Humphry. *The Collected Works of Sir Humphry Davy*, ed. John Davy (London: 1839), II.